

論文

障がい児の母親に期待される「受容」について

About "acceptance" expected of mothers  
of children with disabilities

上地 玲子<sup>1)</sup>・松浦 美晴<sup>2)</sup>

Reiko Kamiji・Miharu Matuura

キーワード：障がい児，母親，受容

Key Word: Children with disabilities, mothers, acceptance

はじめに

親が我が子の障がいを受容するプロセスには、「段階説」と「慢性的悲哀説」、さらにその2説を包括した螺旋モデル説がある(阿南ら,2007;中田,1995;一瀬,2011)。しかし、この「受容」の扱いについては、夏堀(2003)が次のように批判している。すなわち、障がい児の親が我が子の障がいを受容することが「望ましい」とされており、障がい児者の親たちがいわれのない「負担」を強いられていると指摘している。さらに、「受容」についての定義を明確にしないままに障がい児の親の支援モデルに関する研究論文も散見されており、研究者間における統一見解もないことも指摘している。また水島(2003)は、「障がい受容」と題していても、実際は「適応」について論じているものが多いため、「受容」の定義、「適応」の最終目標の整理などをすべきであることを指摘している。

障がい児の育児においては、特に母親における負担が大きい。「母性神話」「母性信仰」「母性愛」「母性本能」などの言葉に代表されるように、母親には生来母性が備わっており、産んだ我が子に対する無償の愛情を注ぐべき存在であり、育児は母親が主に担うべきであるという社会的な価値観がある。大日向(2001)は、母性に関する研究において、女性であれば誰にでも画一的に育児の適性があるとした従来の母性観を検証することを課題としているものが多い問題点を指摘している。このような視点は、母親自身にもステレオタイプとして無意識に存在し、出産した我が子に障がいがあることによる「受容」について無言のプレッシャーを感じている。

そこで、本研究では障がい児の母親に求められる「受容」について研究されている近年の研究論文の検証をもとに「受容」について考察することを目的とする。

---

1) 2)山陽学園大学総合人間学部生活心理学科

## 方法

### 文献の検索

障がい児の親または母親に求められる我が子の障がい受容に関する研究について、「科学技術情報発信・流通総合システム」(J-STAGE)を用いて文献検索を行った。最終確認は2020年12月25日であった。発表期間を2000年から2020年までの20年間とし、論文タイトル検索条件に「障害」AND「母親」、全文に「受容」、その他「ジャーナル」「日本語」「査読あり」「人文・社会科学系」「医学・保健衛生系」を設定した。その結果、45件がヒットし、研究論文38件を抽出した。2000年から2010年までは12件であり、2011年から2020年までは26件であった(Table1-2)。

KH Corder(樋口, 2014)を用いて38件の文献の標題に含まれる単語(Table3)および複合語(Table4)を抽出し、出現数をカウントした。さらに標題に「障害」AND「母親」AND「受容」が含まれている論文のうち、日本語抄録4件を抽出し、単語(Table5)および複合語(Table6)を抽出し、出現数をカウントした。

## 結果

Table1. J-STAGE 検索結果(2000年から2010年まで)

	著者	発表年	タイトル	雑誌名	巻・号・頁
1	夏堀 摂	2001	就学前期における自閉症児の母親の障害受容過程	特殊教育学研究	39(3),11-22
2	夏堀 摂	2002	自閉症児の母親の障害受容過程：1歳半健診制度化の効果と母親への支援のあり方に関する研究	社会福祉学	42(2), 79-90
3	藤原里佐	2002	障害児の母親役割に関する再考の視点：母親のもつ葛藤の構造	社会福祉学	43(1), 146-154
4	中川 薫	2003	重症心身障害児の母親の「母親意識」の形成と変容のプロセスに関する研究：社会的相互作用がもたらす影響に着目して	保健医療社会学論集	14(1), 1-12
5	泊 祐子	2005	双子の一方に障害児をもつ母親の社会化プロセス	日本看護科学会誌	2(1),39-48
6	中川 薫	2005	子と自分のバランスをとる：重症心身障害児の母親の意識変容の契機とメカニズム	保健医療社会学論集	15(2),94-103
7	田丸尚美	2005	母親が子どもの障害と向き合うための発達臨床：1歳6ヶ月児健診の事例をもとに親子への支援を考える	心理科学	25(2),44-62
8	松岡治子	2006	障害児をもつ母親のソーシャルサポートと抑うつとの関連	北関東医学	56(3), 247-248
9	石谷 健ら	2006	摂食障害患者の情緒安定と無月経の改善に母親による再養育療法が好影響を与えた1症例(診療)	女性心身医学	11(1),69-74
10	森つくりら	2008	聴覚障害幼児の言語指導場面における内発的動機づけの変化と母親からのフィードバックおよび働きかけの影響	特殊教育学研究	46(3),135-147
11	木村美也子ら	2010	広汎性発達障害児をもつ母親の次子妊娠と出産をめぐる体験：年長子の障害を認識していた母親と認識していなかった母親の比較から	保健医療社会学論集	20(2), 50-63
12	山本真実ら	2010	自閉症を主とする広汎性発達障害の子どもをもつ母親の子育てのプロセス	日本看護研究学会雑誌	33(4)21-30

Table2. J-STAGE 検索結果(2011年から2020年まで)

	著者	発表年	タイトル	雑誌名	巻・号・頁
1	一瀬早百合	2011	障害のある乳幼児をもつ母親の変容プロセス：早期の段階における4つのストーリー	社会福祉学	52(2), 67-79
2	夏堀 撰	2011	1950年代における知的障害児の母親モデルの形成	家族社会学研究	23(1), 77-88
3	大鐘啓伸	2011	母子通園施設を利用した母親の心理状態：支援過程において障害児を持つ母親の表出された気持ちから	発達心理学研究	22(3), 308-317
4	山根隆宏	2011	高機能広汎性発達障害児をもつ母親の診断告知時の感情体験と関連要因	特殊教育学研究	48(5), 351-360
5	館山千絵ら	2011	遊び場面にみられる聴覚障害幼児と健聴母親との相互作用の発達的特徴に関する研究 —コミュニケーションと遊びの分析を通して—	特殊教育学研究	49(4), 339-350
6	東村知子	2012	母親が語る障害のある人々の就労と自立語りの形式とずれの分析	質的心理学研究	11(1), 136-155
7	藤本修平ら	2012	障害児を持つ母親の育児ストレスに影響する因子の検討	ストレス科学研究	27, 17-22
8	本山和徳ら	2012	発達障害児の養育に困難感を抱く母親に対するペアレントトレーニングの効果	脳と発達	44(4), 289-294
9	村井裕子	2012	歯科を利用する身体障害のある子どもの口腔ケアにおける母親の工夫	日本小児看護学会誌	21(1), 17-23
10	山根隆宏	2012	高機能広汎性発達障害児・者をもつ母親における子どもの障害の意味づけ：人生への意味づけと障害の捉え方との関連	発達心理学研究	23(2), 145-157
11	有本梓ら	2012	訪問看護師が在宅重症心身障害児の母親を支援する際に重要と考えている点	日本地域看護学会誌	14(2), 43-52
12	江尻桂子	2013	障害児の母親における就労の現状と課題 —国内外の研究動向と展望—	特殊教育学研究	51(5), 431-440
13	山根隆宏	2014	Benefit findingが発達障害児・者の母親の心理的ストレス反応に与える効果	心理学研究	85(4), 335-344
14	山根隆宏	2015	発達障害児・者の母親の心理的ストレス反応過程に対する意味理解の影響	心理学研究	86(4), 293-301
15	日比野直子ら	2015	過疎地域に住む健康障害のある子どもの母親の療育生活の折り合い	日本健康医学会雑誌	24(2), 154-160
16	沼田あや子	2016	発達障害児の母親の語りのなかに見る家族をつなぐ実践「葛藤の物語」から「しなやかな実践の物語」へ	質的心理学研究	15(1), 142-158
17	虫明淑子ら	2016	幼稚園教育における子どもの成長発達を考慮する親支援の事例研究 —交換日記にみる母親の障害受容の過程—	保育学研究	54(3), 20-31
18	松井藍子ら	2016	発達障害児をもつ親の会に属する母親が子育てにおける前向きな感情を獲得する過程	日本地域看護学会誌	19(2), 75-81
19	大久保麻矢	2017	発達障害児の母親の葛藤と戦略 —きょうだいをつくる選択、複数の子どもの母になること—	家族関係学	36, 29-41
20	福田真清	2017	老障介護家庭における知的障害者の自立をめぐる母親が経験するプロセス——複線径路・等至性モデルによる分析を通して——	社会福祉学	58(2), 42-54
21	伊藤由香ら	2018	子どもの発達障害の特性を指摘された母親の子育てにおける体験 —発達障害の特性を指摘されてから専門機関の継続的な支援を受けるまで—	日本地域看護学会誌	21(2), 22-30
22	萩原可那子ら	2019	障害のある子どもをもつ母親の障害受容に関する研究	Journal of Health Psychology Research	31(Special Issue), 253-258
23	藤原紀世子ら	2019	重症心身障害児(者)とその次子をもつ母親の思い	日本小児看護学会誌	28, 95-100
24	尾野明美ら	2019	障害児をもつ母親への子育てレジリエンス促進プログラムの開発と評価の試み	Journal of Health Psychology Research	31(Special Issue), 259-265
25	野尻純子ら	2019	就学前に実施したステップストーンズ・トリプルPの効果に関する研究：自閉症スペクトラム障害を疑われた児の母親への支援	日本公衆衛生雑誌	6(5), 237-245
26	尾花真梨子	2019	自閉スペクトラム症の男子高校生の母親に対する心理面接過程 —就労移行期における障害受容に着目して—	カウンセリング研究	51(3), 168-177

Table3. J-STAGE 検索結果の標題における単語出現回数

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
母親	45	知的	2	教育	1
障害	44	着目	2	契機	1
発達	15	聴覚	2	形式	1
子ども	10	特性	2	径路	1
過程	7	認識	2	経験	1
研究	7	反応	2	継続	1
支援	7	物語	2	月経	1
受容	5	遊び	2	健康	1
プロセス	4	与える	2	健聴	1
影響	4	幼児	2	検討	1
効果	4	養育	2	見る	1
広汎	4	利用	2	現状	1
子育て	4	Benefit	1	言語	1
自閉症	4	finding	1	語る	1
重症	4	あり方	1	交換	1
心身	4	きょうだい	1	口腔	1
心理	4	しなやか	1	向き合う	1
ストレス	3	ケア	1	好影響	1
意味	3	コミュニケーション	1	工夫	1
葛藤	3	ステップングストーン	1	構造	1
		ズ・トリプルP			
関連	3	ストーリー	1	考慮	1
就労	3	プロセス	1	高校生	1
体験	3	ソーシャルサポート	1	告知	1
分析	3	ダウン	1	国内外	1
変容	3	バランス	1	困難	1
スペクトラム	2	フィードバック	1	再考	1
モデル	2	プログラム	1	在宅	1
意識	2	ペアレントトレーニング	1	思い	1
		グ			
感情	2	メカニズム	1	指導	1
機能	2	レジリエンス	1	施設	1
形成	2	安定	1	至	1
健	2	移行	1	視点	1
語り	2	育児	1	試み	1
考える	2	因子	1	歯科	1
歳	2	家族	1	児	1
作用	2	家庭	1	自分	1
子	2	課題	1	実施	1
指摘	2	過疎	1	主	1
事例	2	介護	1	受ける	1
持つ	2	会	1	住む	1
次子	2	改善	1	重要	1
自立	2	開発	1	出産	1
実践	2	獲得	1	症候群	1
社会	2	患者	1	症例	1
就学	2	看護	1	障る	1
場面	2	機関	1	情緒	1
親	2	気持ち	1	状態	1
診る	2	教育	1	親子	1
相互	2	契機	1	診断	1
捉える	2	疑う	1	診療	1

Table4. J-STAGE 検索結果の標題における単語出現回数

複合語	出現回数	複合語	出現回数
障害児	7	一発達障害	1
発達障害児	4	困難感	1
障害受容	3	専門機関	1
重症心身障害児	3	身体障害	1
自閉症児	2	意識変容	1
障害受容過程	2	継続的	1
聴覚障害幼児	2	口腔ケア	1
発達障害児・者	2	発達臨床	1
知的障害児	1	子育てレジリエンス	1
幼稚園教育	1	高機能広汎性発達障害児・者	1
母親モデル	1	ヶ月児健	1
成長発達	1	促進プログラム	1
母子通園施設	1	訪問看護師	1
親支援	1	食障害患者	1
心理状態	1	就学前	1
事例研究	1	在宅重症心身障害児	1
支援過程	1	情緒安定	1
交換日記	1	・トリプル	1
高機能広汎性発達障害児	1	一国内外	1
就学前期	1	無月経	1
診断告知時	1	自閉症スペクトラム障害	1
過程	1	研究動向	1
感情体験	1	再養育療法	1
関連要因	1	スペクトラム症	1
遊び場面	1	展望—	1
制度化	1	男子高校生	1
介護家庭	1	心理面接過程	1
健聴母親	1	言語指導場面	1
知的障害者	1	内発的動機	1
相互作用	1	—就労移行期	1
母親役割	1	心理的ストレス反応	1
複線径路・等至性モデル	1	広汎性発達障害児	1
プロセス	1	心理的ストレス反応過程	1
発達の特徴	1	次子妊娠	1
ダウン症候群	1	意味了解	1
コミュニケーション	1	年長子	1
母親意識	1	過疎地域	1
精神障害者	1	広汎性発達障害	1
育児ストレス	1	健康障害	1
社会的相互作用	1	変容プロセス	1
発達障害	1	療育生活	1
社会化	1		

Table5. J-STAGE 検索結果のうち標題に「障害」「母親」「受容」が含まれている論文の日本語抄録における単語出現回数

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
障害	21	重要	2	差異	1
母親	19	世代	2	仕方	1
受容	14	成長	2	支える	1
時期	8	選択	2	至る	1
診断	8	入会	2	示す	1
子ども	6	年齢	2	自信	1
自閉症	6	比べる	2	自由	1
過程	5	方式	2	質的	1
実施	5	目的	2	質問	1
制度	5	役割	2	主体	1
有意	5	与える	2	取り戻す	1
影響	4	理解	2	受ける	1
結果	4	あり方	1	就	1
行う	4	インターンシップ	1	就労	1
行動	4	キャリア	1	重ねる	1
支援	4	スペクトラム	1	初期	1
時間	4	ペアレントメンター	1	徐々に	1
心理	4	以前	1	状態	1
認める	4	移行	1	新た	1
要する	4	解消	1	進める	1
疑い	3	解明	1	生じる	1
健	3	回想	1	生起	1
困難	3	回答	1	生徒	1
種別	3	確定	1	接見	1
親	3	学校	1	説明	1
診る	3	感情	1	専門	1
調査	3	関係	1	前後	1
反応	3	機関	1	阻害	1
変数	3	客観	1	早い	1
明らか	3	求める	1	相談	1
面接	3	教師	1	促す	1
問題	3	具体	1	促進	1
要因	3	形	1	対応	1
ダウン症	2	経過	1	対処	1
育児	2	経験	1	対象	1
加える	2	見える	1	探る	1
会	2	顕著	1	短い	1
開始	2	現れる	1	段階	1
確認	2	言語	1	男子	1
学期	2	後半	1	長い	1
関連	2	交換	1	長所	1
記述	2	公的	1	直近	1
検討	2	効果	1	吐露	1
研究	2	口	1	当初	1
考察	2	肯定	1	特性	1
歳	2	高める	1	特定	1
罪悪	2	高等	1	特別	1
視点	2	告知	1	日記	1
時点	2	今日	1	認識	1
自身	2	混乱	1	年間	1

Table6. J-STAGE 検索結果のうち標題に「障害」「母親」「受容」が含まれている論文の日本語抄録における複合語出現回数

複合語	出現回数	複合語	出現回数
障害受容	9	心理面接過程	1
自閉症児	5	公的機関	1
障害受容過程	3	面接開始当初	1
有意差	3	対処行動	1
本研究	2	世代間	1
困難さ	2	心理状態	1
歳半健	2	客観的	1
制度化	2	育児困難	1
実施群	2	就労移行期	1
問題行動	2	未実施群	1
罪悪感	2	キャリア選択段階	1
調査時点	2	制度化後	1
支援者	2	障害特性	1
心理的混乱	1	診断時	1
非言語	1	同時期	1
ダウン症群	1	専門家	1
確認、等	1	発達障害	1
自閉症群	1	入会時期	1
主体的	1	診断告知	1
障害種別間	1	障害種別	1
障害受容初期	1	交換日記	1
具体的方策	1	対象者	1
最重要	1	量的分析	1
心理的反応	1	ダウン症児	1
第一次反応	1	肯定感情	1
診断後	1	質問紙法	1
第二次反応	1	学期後半	1
実施以前以後	1	選択方式	1
障害認識	1	自由記述方式	1
世代間比較	1	質的検討	1
本論文	1	回想法	1
実施前後	1	子ども理解	1
スペクトラム症	1	療育開始	1
特別支援学校高等部	1	対応力	1

## 考察

障がい児の母親に求められる「受容」に関する研究論文は、2000年から10年間よりも2010年からの10年間の研究論文が倍増している。多くは、インタビューによる質的研究であり、障がい児を受容するために必要な支援に関する取り組みについて探るものであった。障がい児として取り上げているものは、発達障がい(自閉症スペクトラム)児を対象としたものが多かった。障がい種別の比較では、夏堀(2001)のものがある。ダウン症児と自閉症児の母親の受容過程を比較した夏堀(2001)は、診断を受けたあとから受容までの期間に有意な差はないが、「疑い」から「診断」までには自閉症児の方が長いことや、診断後にも育児等に関する問題が発生して障がい受容を阻害していると述べている。「受容」以外の言葉を用いている論文としては、山根(2015)の「意味理解」と尾野ら(2018)の「レジリエンス」があった。山根(2015)は、「受容」ではなく「意味理解」という言葉を用いて捉えている。この「意味理解」は、普通の親という立場を失い、健常者に価値を置く世間から脱落したことによる喪失を乗り越えようとする親の試みであると述べている。また尾野ら(2018)は、「レジリエンス」という視点から捉え、障がい児の母親への心理的支援プログラムに取り入れることが有益であると述べている。

一方、夏堀(2003)は、親の受容について次のように問題点を指摘している。すなわち、障がい児の親は「共同療育者」および「代弁者」となるための「認識変容」として「障がい受容」を求められており、このような「親の障がい受容」研究は、特定の「良い親」像を作り上げ、現実の親たちはそこに到達しなければならないという負担を強いられる問題点の指摘である。さらに、このような研究者の報告が社会規範を後押ししている可能性についても言及している。また藤原(2002)は、育児や介護のあり方が多様化し、女性の意識も変化しているにも関わらず、障がい児の母親が「もう1人の当事者」となっている現状について批判している。このような障がい児の育児における母親の過重負担は、国内だけでなく、国外においても母親の就労を困難にしている(江尻,2014)。特に問題行動の多い障がい児の母親はストレスを抱えやすい(藤本ら,2012)。一瀬(2011)は、母親に対して「障害受容」というあらかじめ設定されたゴールを目標とするのではなく、母親自身が意味づけることを尊重して寄り添うことが必要であると述べている。

支援による受容促進に関するものは、医療や療育関係者などの専門家、家族のほかに、同様の障がい児を育てている母親が挙げられているものもある(萩原ら,2019; 尾野,2019)。萩原(2019)は、「ピアサポート」によって孤独回避、安心感や落ち着きを得られるだけでなく、子どもに障がいがある事実を受け止められていなかったり、支援を受けることの意味を見出せていない母親にとっては、考え方や視野が広がり行動の変化につながることを見出している。

ところで、上記抽出結果の研究論文の中には、「受容」という言葉について明確に定義を記載しているものはなかった。来談者中心療法の創設者であるカール・ロジャーズは、カウンセリングにおけるセラピストの3条件の1つに「受容」を挙げている。その定義は「セラピストは来談者に対して無条件の肯定的関心を持つ」である。このことを育児に置き換えると、「母親は我が子に対して無条件の愛情を持つ」ということだろうか。しかし、それは「母性神話」などの言葉に代表されるように、生来備わるものではない。まして、セラピストのような訓練を受けることもなく、「母親」になっている。つまり、障がい児の

母親は、「障がい児の母親」になるための教育や訓練を受けないままに「受容」を強いられていることになる。また、適切な支援があれば「受容」に至るという発想も単純なのかもしれない。そのような視点で考えるならば、中田(1995) <sup>ii</sup>の螺旋モデル説が「受容」について現実の親の心情を反映しているものに近いのではないかと考えられる。この螺旋モデルは、段階説が唱えるゴールとしての最終段階があるのではなく、障がいを肯定する気持ちと否定する気持ちの両方の感情が常に存在することを示している。「受容」が目標ではないというモデルは、「受容しなければならない」という暗黙のプレッシャーを排除するだけでなく、障がい児育児の過程において発生する様々な問題発生時に陥る親の心理を反映している。

しかし、この螺旋モデルだけでは説明できない問題が浮上している。それは、国内で2013年から始まった新しい出生前検査である「母体血胎児染色体検査(noninvasive prenatal testing ;NIPT)」によって、障がい児とくにダウン症児を出産した親にとっては、別の要因が絡んでいる。玉井(2018)は、NIPTによって陽性(つまり胎児に異常がある)と判定された妊婦の多くが妊娠を中断している問題点を指摘している。「障がい児は中絶する」という倫理的問題については、今後議論を深めて行く必要があり、その対象として挙げられやすい「ダウン症児」の母親については、螺旋モデルだけでは説明できない部分もあり、さらに検討を重ねていく必要がある。

### 文献

- 阿南 あゆみ・山口 雅子(2007).親が子供の障害を受容して行く過程に関する文献的検討.産業医科大学雑誌 29(1),73-85.
- 有本梓ら(2012).訪問看護師が在宅重症心身障害児の母親を支援する際に重要と考えている点.日本地域看護学会誌 14(2), 43-52.
- 江尻桂子(2013).障害児の母親における就労の現状と課題—国内外の研究動向と展望—.特殊教育学研究 51(5),431-440.
- 藤本修平ら(2012).障害児を持つ母親の育児ストレスに影響する因子の検討.ストレス科学研究 27, 17-22.
- 福田真清(2017).老障介護家庭における知的障害者の自立をめぐる母親が経験するプロセス—複線径路・等至性モデルによる分析を通して—.社会福祉学 58(2),42-54.
- 藤原里佐(2002)障害児の母親役割に関する再考の視点：母親のもつ葛藤の構造 社会福祉学 43(1), 146-154.
- 藤原紀世子ら(2019).重症心身障害児(者)とその次子をもつ母親の思い.日本小児看護学会誌 28, 95-100.
- 古屋 健・中田 洋二郎(2018).発達障害の家族支援における「障害受容」 — その概念の変遷を巡って —.応用心理学研究年 44(2),131-138.
- 日比野直子ら(2015).過疎地域に住む健康障害のある子どもの母親の療育生活の折り合い.日本健康医学会雑誌 24(2),154-160.
- 東村知子(2012).母親が語る障害のある人々の就労と自立語りの形式とずれの分析.質的心理学研究 11(1), 136-155.
- 萩原可那子ら(2019).障害のある子どもをもつ母親の障害受容に関する研究.Journal of

- Health Psychology Research31(Special\_issue), 253-258.
- 一瀬早百合(2011).障害のある乳幼児をもつ母親の変容プロセス：早期の段階における4つのストーリー.社会福祉学 52(2),67-79.
- 石谷 健ら(2006).摂食障害患者の情緒安定と無月経の改善に母親による再養育療法が好影響を与えた1症例(診療).女性心身医学 11(1),69-74.
- 伊藤由香ら(2018).子どもの発達障害の特性を指摘された母親の子育てにおける体験—発達障害の特性を指摘されてから専門機関の継続的な支援を受けるまで—.日本地域看護学会誌 21(2),22-30.
- 岩瀬峰子ら(1996). 障害児の母親の「障害告知と受容」の実態について：母親に対するアンケート調査から. 理学療法学 23(2),126.
- 木村美也子ら(2010).広汎性発達障害児をもつ母親の次子妊娠と出産をめぐる体験：年長子の障害を認識していた母親と認識していなかった母親の比較から.保健医療社会学論集 20(2), 50-63.
- 尾花真梨子(2019).自閉スペクトラム症の男子高校生の母親に対する心理面接過程—就労移行期における障害受容に着目して—.カウンセリング研究 51(3),168-177.
- 松岡治子(2006).障害児をもつ母親のソーシャルサポートと抑うつとの関連.北関東医学 56(3), 247-248.
- 松井藍子ら(2016).発達障害児をもつ親の会に属する母親が子育てにおける前向きな感情を獲得する過程.日本地域看護学会誌 19(2),75-81.
- 水島 繁美(2003).障害受容再考.リハビリテーション医学 40(2),116-120.
- 水野恵理子ら(2018).ダウン症候群の子どもをもつ母親が捉える精神障害者.日本健康医学会雑誌 27(2),144-150.
- 村井裕子(2012).歯科を利用する身体障害のある子どもの口腔ケアにおける母親の工夫.日本小児看護学会誌 21(1),17-23.
- 森つくりら(2008).聴覚障害幼児の言語指導場面における内発的動機づけの変化と母親からのフィードバックおよび働きかけの影響.特殊教育学研究 46(3),135-147.
- 本山和徳ら(2012).発達障害児の養育に困難感を抱く母親に対するペアレントトレーニングの効果.脳と発達 44(4), 289-294.
- 虫明淑子ら(2016).幼稚園教育における子どもの成長発達を考慮する親支援の事例研究—交換日記にみる母親の障害受容の過程—.保育学研究 54(3),20-31.
- 中川 薫(2003).重症心身障害児の母親の「母親意識」の形成と変容のプロセスに関する研究：社会的相互作用がもたらす影響に着目して.保健医療社会学論集 14(1), 1-12.
- 中川 薫(2005).子と自分のバランスをとる：重症心身障害児の母親の意識変容の契機とメカニズム.保健医療社会学論集 15(2),94-103.
- 中田洋二郎(1995)親の障害の認識と受容に関する考察-受容の段階説と慢性的悲哀.早稲田心理学年報 27,83-92.
- 夏堀 撰(2001).就学前期における自閉症児の母親の障害受容過程.特殊教育学研究 39(3),11-22.
- 夏堀 撰(2002).自閉症児の母親の障害受容過程：1歳半健診制度化の効果と母親への支援のあり方に関する研究.社会福祉学 42(2), 79-90.

- 夏堀 撰(2003).障害児の「親の障害受容」研究の批判的検討.社会福祉学 44(1),23-33.
- 夏堀 撰(2011).1950年代における知的障害児の母親モデルの形成.家族社会学研究 23(1),77-88.
- 沼田あや子(2016).発達障害児の母親の語りのなかに見る家族をつなぐ実践「葛藤の物語」から「しなやかな実践の物語」へ.質的心理学研究 15(1), 142-158.
- 野尻純子ら(2019).就学前に実施したステッピングストーンズ・トリプルPの効果に関する研究：自閉症スペクトラム障害を疑われた児の母親への支援.日本公衆衛生雑誌 6(5),237-245.
- 大鐘啓伸(2011).母子通園施設を利用した母親の心理状態：支援過程において障害児を持つ母親の表出された気持ちから.発達心理学研究 22(3),308-317.
- 大日向雅美(2001).母性研究の課題 心理学の研究は社会的要請にいかに応えるべきか.教育心理学年報 40,146-156.
- 大久保麻矢(2017).発達障害児の母親の葛藤と戦略 ―きょうだいをつくる選択、複数の子どもの母になること―.家族関係学 36,29-41.
- 尾野明美ら(2019).障害児をもつ母親への子育てレジリエンス促進プログラムの開発と評価の試み.Journal of Health Psychology Research31(Special\_issue), 259-265.
- 坂中正義ら(2015). ロジャーズの中核三条件 受容:無条件の積極的関心:カウンセリングの本質を考える 2. 創元社
- 館山千絵ら(2011).遊び場面にみられる聴覚障害幼児と健聴母親との相互作用の発達的特徴に関する研究―コミュニケーションと遊びの分析を通して―.特殊教育学研究 49(4),339-350.
- 玉井 浩(2018).教育・福祉と連携したダウン症総合診療の構築を目指して.脳と発達 50(2), 98-103.
- 田丸尚美(2005).母親が子どもの障害と向き合うための発達臨床：1歳6ヶ月児健診の事例をもとに親子への支援を考える.心理科学 25(2),44-62.
- 泊 祐子(2005).双子の一方に障害児をもつ母親の社会化プロセス.日本看護科学会誌 2(1),39-48.
- 山本真実ら(2010).自閉症を主とする広汎性発達障害の子どもをもつ母親の子育てのプロセス.日本看護研究学会雑誌 33(4),21-30.
- 山根隆宏(2011).高機能広汎性発達障害児をもつ母親の診断告知時の感情体験と関連要因.特殊教育学研究 48(5),351-360.
- 山根隆宏(2012).高機能広汎性発達障害児・者をもつ母親における子どもの障害の意味づけ：人生への意味づけと障害の捉え方との関連.発達心理学研究 23(2),145-157.
- 山根隆宏(2014).Benefit finding が発達障害児・者の母親の心理的ストレス反応に与える効果.心理学研究 85(4),335-344.
- 山根隆宏(2015).発達障害児・者の母親の心理的ストレス反応過程に対する意味了解の影響.心理学研究 86(4),293-301.

i 本研究では、「障害」の漢字を使用せず「障がい」と表記する。

ii J-stage の検索では検出不可であった。